資料館ノート　第 103 号　　平成 26 年 5 月 16 日発行

大相撲の歴史と深川①

富岡八幡宮と大相撲の石碑

江東区深川江戸資料館

はじめに

深川の富岡八幡宮（江東区富岡１丁目）は、大相撲の新しい横綱が誕生した折に、横綱力士碑への刻銘奉告祭とともに奉納土俵入りが行われている、相撲と大変ゆかりの深い神社です。

資料館ノートでは本号から６回にわたり、この大相撲の歴史と江東区について紹介します。今回は富岡八幡宮境内にある相撲に関する主な史跡、石碑について、その由来や内容を建立年代順にみていきます。

1. 富岡八幡宮と勧進相撲

富岡八幡宮は、寛永４年（1627）長盛法印がこの地に八幡宮を創祀し、やがて幕府により大規模な社殿が造営されたのがはじまりといわれています。

勧進相撲とは、寺社修築等の資金を募るために行われた興行形式で、江戸時代の相撲興行は勧進相撲という名称で行われていました。

江戸の町では勧進相撲がしばしば喧嘩闘争の場となるほど荒れることがあったため、江戸時代初期には幕府から禁止されていました。ところが貞享元年（1684）、雷権太夫らが富岡八幡宮境内での勧進相撲を寺社奉行へ願い出たところ許可が下りました。その理由は、新開地であった深川地域の繁栄と、富岡八幡宮社殿の復興を目的としていたといわれています。以後、公許の勧進相撲が恒例化され、その形が整えられていきます。

2. 富岡八幡宮境内にある相撲に関する史跡、石碑

(1) 野見宿禰社

現在、社殿裏手にある野見宿禰社は、「御府内備考」続編（文政 12 年・1829）によると天明５年（1785）に勧請されたと伝えられます。

この野見宿禰は、第 11 代垂仁天皇の代に当麻蹶速と力比べをして勝利し、相撲の始祖として信仰されています。江戸時代、幕内力士は興行打ち上げ後にお礼参りとともに、この野見宿禰社の前で四股を踏むのが年々の例となっていたとの伝承もあります。

図１　横綱力士碑と関連碑
社殿裏手には、横綱力士碑とともに、関連の碑があります。

(2) 釈迦ヶ嶽等身碑、天明７年（1787）

釈迦ヶ嶽は寛延２年（1749）出雲国（現在の島根県）に生まれ、雷電為五郎の弟子となり大坂で初土俵、明和７年（1770）の江戸番付に東大関として登場します。身の丈７尺５寸（約 2.27 メートル）800 匁（180 キロ）の江戸相撲はじまって以来の大型力士でした。しかし、江戸在場所中、若干 27 歳にして亡くなってしまいました。本碑は釈迦ヶ嶽の実弟である真鶴咲右衛門によって 13 回忌にあたる天明７年（1787）に、追善のため野見宿禰社のそばに建立されました。釈迦ヶ嶽の等身碑である本碑は、高さ 2.27 メートルの円柱形の碑です。

(3) 横綱力士碑、明治 33 年（1900）

本碑は、横綱の顕彰と歴史を伝えるため、陣幕久五郎（第 12 代横綱）が発起人となり各界の協賛を得て奉納したものです。その大きさは、高さ 3.5 メートル、横３メートル、厚さ１メートル、重量 20 トンと、ひと際大きな碑です。

碑の裏面には、初代明石志賀之助以降歴代横綱の四股名、横綱免許取得年月、出身地が刻まれています。建碑の協賛者には、伊藤博文、山県有朋、西郷従道、

徳川家達、李鴻章、9代目市川団十郎・5代目尾上菊五郎（同時に仙台石を奉納、現大関力士碑として使用）、田中光顕、松方正義、渋沢栄一、中村清蔵等々、国内外の政財界の名士から歌舞伎役者に至るまで300名を超える賛助を得ました。本碑建立が各界の名士らにも注目されていたことがわかります。

また、同じ玉垣内には、新横綱力士碑、陣幕顕彰碑、不知火顕彰碑、魚かし石柱、明石貳個寄附碑、日月石碑、地固め寄付碑、土台下玉垣、大関碑案内碑があります。

(4) 大関力士碑、昭和58年（1983）

本碑は、富岡八幡宮宮司である富岡興永氏の発案のもと、元力士・記者・漫画家であった小島貞二氏と相撲趣味の会の加藤健治の調査に基づき建てられました。

江戸時代、「看板力士」という興行重視の制度があり、なかには実力の伴わない大関もいました。体の大きな力士がいると、興行の観客も増えるためです。そこで、歴代の大関の中から横綱力士、看板大関を除いた実力力士102名の名を選出し、江戸時代の初代雪見山（宝暦7年〈1757〉）から名が刻まれました。現在もなお刻名は続いています。

(5) 巨人力士身長碑、昭和58年（1983）

本碑建立のきっかけは、大関力士と同様に、富岡興永氏の発案によるもので、小島氏と加藤氏の協力を得て建立されました。

大相撲の長い歴史の中で、釈迦ヶ嶽に負けない巨人力士がおり、その背くらべを一つの石で示してみたいという趣旨のもと、歴代の巨人力士の四股名と身長が刻まれています。巨人の基準を、大正～昭和に“文ちゃん”の愛称で人気を博した出羽ヶ嶽文治郎の6尺7寸7分（約2.05メートル）とし、その身長より高い力士12名が刻まれています。最も身長の高い力士は、天保・弘化年間（1830～1848）に活躍した生月鯨太左衛門の7尺6寸(約2.30メートル)です。

(6) 強豪関脇力士碑、昭和62年（1987）

横綱、大関につぐ関脇のなかでも、大関を上回る実力を持つ名力士や好力士と呼ばれた土俵人気を盛り上げた力士たちがいました。本碑は、彼らの中から“強豪”といわれる力士を顕彰するために建立されました。

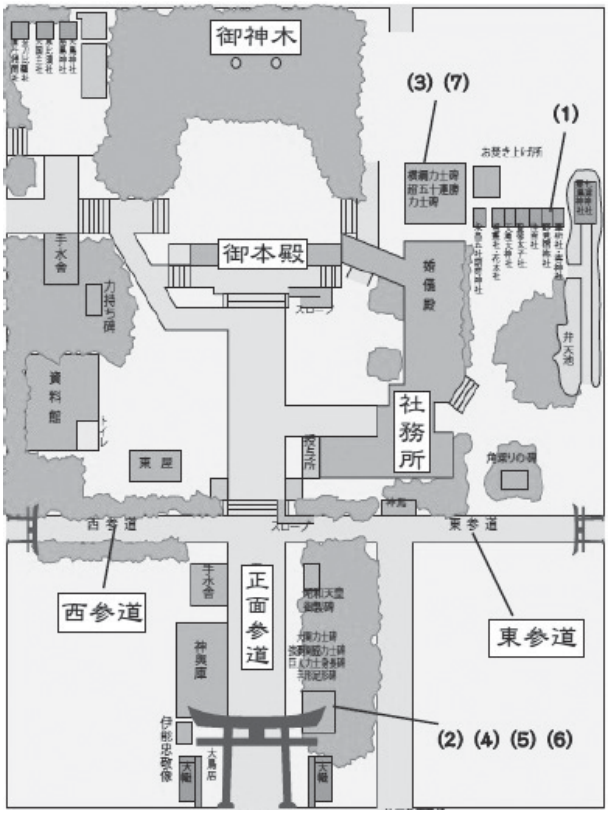

図2　富岡八幡宮境内図（富岡八幡宮提供）
本号で取り上げた野見宿禰社、石碑の位置を番号とともに示しています。

“強豪”の基準は、幕内力士としての成績のほか、実績が豊富で、現在でいう三賞（殊勲・敢闘・技能）に値する成績が重視されました。また、活躍した場所数は少なくても、脱退や死亡で大関になれなかった力士も考慮されました。宝暦7年（1757）～昭和33年（1958）の42名が選出され、四股名と出身地が刻まれています。

(7) 超五十連勝力士碑、昭和63年（1988）

大相撲の記録のなかでも連勝記録への注目が高まりました。大相撲の長い歴史の中で、50連勝以上を達成した力士は数少なく、本碑はこれらの力士を顕彰するために建立されました。

碑には、現在50連勝を達成している5名（第4代横綱谷風梶之助の63連勝、第15代横綱梅ヶ谷藤太郎の58連勝、第22代横綱太刀山峰右衛門の56連勝、第35代横綱双葉山定次の69連勝、第58代横綱千代の富士貢の53連勝）の四股名と連勝記録が年代順に刻まれています。なお、第69代横綱白鵬翔（63連勝）の名はまだ刻まれていません。

50連勝に及ばないものの、大鵬幸喜（第48代横綱）の45連勝は歴代7番目の記録です。